

2023 年度 教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部 学科	職位	氏 名
経営学部 地域ビジネス学科	教授	船木恵一
最終学歴	学 位	専門分野
早稲田大学社会科学部	社会科学士	メディア・マーケティング

I 教育活動

○理念・目標・方針・計画（方法）

【理念】

- ・学生の「自主的な学び」の意欲喚起こそが成長の原動力

【目標】

- ・担当講義科目において、いずれの科目でもトリプルエイトの達成を目指す。トリプルエイトとは対面授業の出席率、履修者の単位習得率、学習意欲の向上のいずれも 80%以上を KPI とする。
※学習意欲の向上とは授業評価アンケート等で、学習意欲の向上につながったかという質問の回答、非常にそう思う＋そう思うの合計値が 80%以上であること。
- ・演習科目においては「学生個人の成長実感」の向上を目標とする。数値的な計測は困難であるため、演習全体及び個人による研究活動、課外活動、成果発表、進路選択等で総合的に判断してゆく。

【方針】

- ・講義科目においては、各回の学習テーマに対する興味・関心を図るため、できるだけ反転授業のように事前に予習課題に取り組みせ、授業への参加意欲を高める。授業素材ではスライドだけでなく、動画など視聴覚に訴える材料を用いる。
- ・演習科目においては、演習毎に異なる方針を採用する。総合演習（再履修クラス）では、学習意欲の喚起、自己肯定感の醸成を図り、退学にいたらないように個人との対話を重視し、大学への定着を図る。専門演習（3 年）では、自己認識と社会への関わり方を考えさせるテーマ学習や課外活動を通じて進路を考える契機をつくる。演習全体と個人とのコミュニケーションを平行して行う。専門演習（4 年）では、学生生活の集大成としての論文研究に焦点をあて、進路支援と合わせた個人対応を行う。

【計画（方法）】

- ・全ての講義科目において、以下の 3 原則を徹底する（アプローチ手法）
 - 1) 学修ニーズの把握 その科目に何を求めているかを適宜ヒアリングする。
 - 2) 個別対応の徹底 講義科目では全ての課題へのフィードバックを毎週行う。
 - 3) SA を活用した授業運営と改善 学生の提出物のデータ分析・可視化などの効率化だけでなく、学生視点から見た、わかりやすく楽しく学習できる素材制作を行う。

【担当科目】

（前期）

情報メディア論、総合ビジネス基礎（a, b）、総合演習Ⅰ（再履修）、専門演習Ⅰ、専門演習Ⅲ

（後期）

EMEA 研究、コンテンツビジネス論、リーダーシップ入門、総合演習Ⅱ（再履修）、専門演習Ⅱ、専門演習Ⅳ

○教育方法の実践

- ・講義科目では前後期全て対面方式、さらに SA の起用による学生視点を考慮した資料準備を実施。計画通り 3 原則を実施。1) 学生ニーズの把握を常に心掛ける 2) One to One 対応を可能な限り実施する 3) 学習する意味を常に考えさせる問いかけを行う。特に、講義科目の課題のフィードバックは、原則全ての履修生に対して、毎週個別に行うことを徹底した。
- ・演習科目では、Microsoft Teams の Chat 機能を活用して、学生との個別コミュニケーション、並びに学生同士のコミュニケーションを活発化させた。双方向性の確保だけでなく、授業時間以外での緊張感をキープし、演習活動への主体的参加意欲の向上を狙ったものである。
- ・総合演習 I&II では再履修クラス。前期と後期の履修学生が異なったり、すでに学習意欲が著しく低下した学生が自動的に履修登録したりするため、対面授業時以外での交流や自主的な活動を求めることはしなかった。
- ・一方、専門演習 I&II では、対面授業とオンラインの双方で、学生のゼミ参加への積極性や自主的活動が促進され、年間を通じてゼミとしての結束感を維持・発展できた。また、具体的な活動として、学生祭への参加、“グランパスビジネスコンテスト”への応募、100 周年記念事業であった“なんでもチャレンジコンテスト”への応募、語学学習の取組や海外への短期研究への参加など、積極的な課外活動を誘発することができた。
- ・専門演習 III&IV では、Teams を活用することにより、演習時間以外でのコミュニケーションが活発となり、進路指導だけでなく、例年と比較して研究論文の執筆行動が、質・量ともに飛躍的に向上した。

○作成した教科書・教材

- ・全ての科目の講義資料を作成した。スライド資料（パワーポイント約 30～60 枚/回）、動画資料（スライド内容の解説動画 3～5 分程度/回、その他参考資料動画 5 分程度/回）

○自己評価

- ・前後期のいくつかの講義科目においてトリプルエイトを実現できなかった。（下線未達成）

開講期	科目名	履修者数	出席率（平均）	単位取得率	学習意欲向上
前期	情報メディア論	121	<u>77.3%</u>	87.6%	<u>調査対象外</u>
前期	総合ビジネス基礎 a	90	<u>73.0%</u>	83.3%	<u>調査対象外</u>
前期	総合ビジネス基礎 b	49	<u>76.9%</u>	90.0%	<u>調査対象外</u>
後期	リーダーシップ入門	39	<u>78.6%</u>	87.2%	81.1%
後期	コンテンツビジネス論	133	<u>77.8%</u>	93.2%	<u>調査対象外</u>
後期	EMEA 研究	11	90.0%	100%	<u>100.0%</u>

2023 年度は新たに担当した科目（リーダーシップ入門、EMEA 研究）以外では、2022 年度より履修学生数が増加した。授業評価アンケートの対象外であった科目が多かった（調査対象外と表記ある科目）。出席率低下の要因については、複数の要因が考えられるが、単位取得率が低下していないことを考えると、学生の意識変化（2/3 出席すれば単位取得対象となれるため、必ずしも全ての講義に出席する必要があると考える）が背景にあると推測される。

- ・演習科目は、授業評価アンケートが対象外であるため、出席率と単位取得率のみ。総合演習（再履修クラス）では出席率及び単位取得率が低かった。これは、既に退学を決めており、退学にいたらなくても全く学習意欲のない学生（前後期各 2 名）が一度も出席しなかったことによる。保証人との接触も不可能であった学生には早期に TSS へハンドリングすべきであった。

開講期	科目名	履修者数	出席率（平均）	単位取得率
前期	総合演習Ⅰ（再履修）	7	<u>51.4%</u>	<u>57.1%</u>
前期	専門演習Ⅰ	14	87.6%	100%
前期	専門演習Ⅲ	15	85.0%	100%
後期	総合演習Ⅱ（再履修）	5	<u>56.7%</u>	<u>60.0%</u>
後期	専門演習Ⅱ	14	84.3%	100%
後期	専門演習Ⅳ	11	85.0%	100%

- ・自身のクレドである「どうやったら楽しくできるか」を実践できるように、ビジネスや社会課題に向き合うことは自己実現であるというポジティブな見方を伝えることに注力した。
- ・講義・演習どの科目においても、変化の激しい社会環境に対応できる判断力と思考力の育成を目指し、知識偏重ではない実践的な思考と自らの考えを表現する能力を向上させる授業運営を心掛けた。
- ・2023 年度はコロナ禍が沈静化し、いかに学生をキャンパスに戻すかを課題として捉え、講義科目・演習科目のいずれにおいても、できる限り学生一人一人との対話を増やすことに務めた。

Ⅱ 研究活動

○研究課題

1) VR 技術及びメタバース研究

IT プラットフォーム大手、Meta や Microsoft が提供するハードウェアやサービスが、今後メタバース市場をどのように発展させ、VR 技術を用いたコミュニケーションが教育市場に与える影響を考察する

2) AI によるナラティブ分析

AI による VOC (Voice of Consumer) の構造解析の最新事例研究

ナラティブ分析が経営判断やマーケティング投資にどのような根拠をもたらすか、その有用性の検証手法を探る

○目標・計画

【目標】

- 1) メタバースのソフトウェア研究（言語教育、観光、コンテンツ制作系）
参入企業、機能、ユーザー数、拡張機能など
- 2) Earth. AI の事例研究及ぶスパーモデル方式の AI 事例研究

【計画】

- 1) 演習学生の協力を得て、Quest で体験できるソフトの選出と分類、文献調査
学習効果等のヒアリング
- 2) Significant System 社のライセンス契約延長と事例のモニター。(株)ハカルス社の
マーケティング支援を通じての事例研究

○2016 年 4 月から 2024 年 3 月の研究実績（特許等含む）

（著書）

- ・愛知東邦大学地域創造研究所編、大勝志津穂、梶山亮子、手島慎介、加納輝尚、山本恭子、上野真由美、舩木恵一、深谷和広、阿比留大吉、河合晋、水野英雄、奥村実樹、若月博延、『地域が求める人材』唯学書房、2019 年 3 月発行

（学術論文）

- ・なし

（学会発表）

- ・なし

（特許）

- ・なし

（その他）

- ・2022 年 6 月日本ビジネス実務学会第 41 回年次全国大会（ランチョンセッション）
『ニューノーマル時代の地域連携を考える—大学は何を考えるべきか：愛知東邦大学の事例をもとに—』愛知東邦大学における地域連携の変遷をふまえ、近年の取り組み、今後の展望を事例として紹介。地域連携パートナーを増化、地域連携 PBL の取り組み活性化のための設備充実、地域の子どもの運動不足解消を目指すイベント活動への取り組み、名古屋グランパスエイトとの教育連携などの諸施策を紹介した。ビフォーコロナの取り組みだけでなく、中長期計画をもとに、ニューノーマル時代を迎えようとしている混沌とした中で、大学の新たな地域連携を考えるためのいくつかの切り口を提案した。
- ・2020 年 10 月（株）ハカルスのヘルスケア産業向けスパースモデリング方式 AI 開発セミナー参加
- ・2020 年 8 月（株）ハカルスのマーケティングアドバイザー契約を継続
- ・2020 年 5 月 Earth AI の AI に関するナラティブ情報のモニターを開始
- ・2020 年 4 月 Significant System 社の Partner 契約更新
- ・2019 年 12 月株）ハカルスのマーケティングアドバイザー契約を継続
- ・2018 年 11 月 Significance System 社（豪）日本パートナー契約の更新
- ・2018 年 6 月（株）ハカルスのリブランディング作業（AI 分析サービスのカテゴリー分類とネーミング化、商標登録に向けた準備作業など）
- ・2018 年 4 月（株）ハカルスのマーケティング顧問就任
- ・2017 年 5 月（株）電通ワンダーマン主催の最新マーケティング事例研究会にて講演
『ヘルスケアビジネス事業領域におけるナラティブ分析について』
- ・2017 年 6 月 NTT ドコモにおける AI のマーケティング活用研究会にて、ナラティブ分析の成果応用に関する講演を実施『D ポイントのナラティブ分析とビジネス応用について』
- ・2017 年 7 月 大塚製薬の更年期障害緩和サプリ『エクオール』のナラティブ分析レポート解説
- ・2017 年 8 月 再春館製薬所の『ドモホルンリンクル』の国内・海外ナラティブ分析の提案
- ・2017 年 8 月 中央日本総合観光機構『Go Central Japan』にて講演『AI（人工知能）によるナラティブ分析がマーケティングをどう進化させるか』
- ・2016 年 5 月（株）電通ワンダーマン主催の最新マーケティング事例研究会にて講演『デジタルマーケティング新潮流 AI（人工知能）によるナラティブ分析がマーケティングをどう進化させるか』
- ・2016 年 5 月 東邦会講演『デジタルマーケティングの新潮流—AI の展望と活用について—データによって、マーケティングが大きく変わる—』

- ・2016 年 8 月 Significance System 社の研究活動にて資生堂及びリクシルの海外市場におけるナラティブ分析の日本語版レポート作成の共同作業チームに参加

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

- ・なし

○所属学会

- ・日本経営学会、日本マーケティング学会、日本ビジネス実務学会

○自己評価

- ・研究課題Ⅰである、VR 技術及びメタバースに教育活用については、” Risk Glory” ” Sprts&Scramble” ” VR CHAT” などソフトウェアを用いて、演習生とともに利用可能な研修テーマや類似ソフトのリサーチ、長時間連続使用の影響などを調査した。
- ・研究課題Ⅱである、AI によるナラティブ分析については、Significant System 社の Earth.AI の企業分析データ、株）ハカルのスパースモデリング方式の AI 診断システムを中心に事例研究を継続。各産業での活用が本格化する Open AI の Chat GPT との API 連携について、マーケティング分析領域と医療・ヘルスケア領域に焦点をあて、事例研究を継続した。

Ⅲ 大学運営

○目標・計画

【目標】第3次中期経営計画の推進を通して愛知東邦大学及び東邦学園の地位向上を図る

【計画】理事会にて任命された担務及び学務分掌にて定められた役割を遅滞なく行う

- 1) 理事（ブランド及び DX 担当）の業務推進 東邦学園 100 周年事業委員会 DX 推進室長業務など
- 2) 学務（教学マネジメント本部、自己点検評価委員会、人権問題・個人情報管理委員会、国際交流センター運営委員会、FDSD 委員会、人事委員会、広報委員会など）事務方執行部との連携を強化し、中期計画のローリング（点検と軌道修正）を行う
特に 2025 年開講予定の経営学部新学科の実現に向けて、マーケティングの強化を図る
その他、担務や学務分掌にとどまらない全学的視点から、問題発見と解決を心がける

○学内委員等

常任理事会、教学マネジメント本部会議、運営会議、大学協議会への定例出席、DX 推進室長国際交流センター運営委員会（副委員長）、自己点検評価委員会及び実施部会、人事委員会（副委員長）、FD・SD 委員会、人権問題・個人情報管理委員会（委員長）、広報委員会

○自己評価

- ・DX 推進室長として、本学の DX の長期ビジョン策定とデータ基盤整備に取り組んだ。
新規事業予算の確保が困難であることから、学生データベースの再構築、学生とのインターフェース改善、学生ポートフォリオ開発等の具体的成果は得られていない。
- ・第三期中期計画の進捗確認及び現状の課題について、理事会・評議員会に報告。長期的な学生募集戦略の策定と新規事業と財務計画との整合性検証が必要であることを指摘した。
- ・経営学部の学科再編及び新学科開講（2025 年度）に向けたマーケティングを広報委員会にて検討
- ・学園 100 周年事業の各種イベント事業の遂行を行った。（なんでもチャレンジコンテスト等）

- ・国際交流センター運営委員として、2023 年 7 月韓国の安養大学・啓明大学を訪問し、連携協定調印式に参加。また、2024 年 2 月に実施された安養大学との交換研修プログラムで来日した韓国学生の歓迎イベントなどに参加。
- ・講義時間と主要会議日程をバランスよくコーディネートしていただいた事務局に感謝したい

IV 社会貢献

○目標・計画

- 【目標】学園経営、大学の地域・国際連携、産学連携に SDGs などの社会課題の視点を取り入れる
- 【計画】学務・教育・研究において、直接的・間接的な関与でも具体的な取り組みの実現を図る
海外提携校の開拓を通じ、学園・大学の国際化だけでなく、草の根の交流機会をつくる

○学会活動等

- ・2024 年 2 月日本ビジネス実務学会 中部ブロック研究会（テーマ教育 IR と AI）出席
同研究会にて学生発表の支援も実施（アルマ・リナックスの物語と体験）

○地域連携・社会貢献等

- ・2022 年 11 月 23 日東邦学園 100 周年記念スポーツ講演会「小中学生のあるべきスポーツ環境を考える」において、第三部のシンポジウムにおいて司会進行役を担当。同時に DX 推進室にてハイフレックス方式（対面とオンライン配信の同時進行）を試み、学内にノウハウとして定着させることに成功。
- ・2023 年度も“グランパスビジネスコンテスト”審査員、“地域と連携した授業・活動報告会”審査員、そして TOH0100 周年“なんでもチャレンジコンテスト”審査員

○自己評価

- ・学務と教育に集中したため、社会貢献活動については個人の時間を割く余裕はあまりなかった

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学会交流、自己研鑽等）

- ・特になし

VI 総括

- ・2023 年度はポストコロナとして、学生のバック to キャンパスを確実に行うことに注力した。
また、学園理事として中期経営計画の進捗確認と DX 推進の担当を拝命した。
- ・中期経営計画は、順調に推移している事項もあるが、大型の新規事業は予算不足が主たる要因で見直しや延期を余儀なくされている。中期計画の到達規模や年次目標の見直しが必要となった要因は、学生募集の低迷、中退者の減少が進まないことである。
- ・DX 推進では、学園・大学の各イベントにおいてハイフレックス方式による運営ノウハウの蓄積が図られ、また出張稟議など一部業務の意思決定のデジタル化を進めた。また、セキュリティポリシーや個人情報保護のマニュアルの整備も着手したが、データの利活用においてはまだ課題ふあ多く、大きな成果獲得及び生産性向上には至っていない。
- ・学生の学習・行動データをもとにした教育課程の改善や課外活動の設計について、IR 推進をさらに進めるという DX の方向性は定めつつも、専任 IT 人材の確保、戦略的な投資予算の確保が十分に実現できず、新たなシステム構築は 2025 年度以降に持ち越される。理事会・大学全体における DX の取組に関するビジョンの可視化、成果イメージの共有化をさらに進めなければならない。

- ・100周年を契機とする学園ブランディングでは、メディアを活用した対外向けPRプログラムだけでなく、大学・高校の一体感を醸成する共同プロジェクトも成果を挙げた。2024年度も“なんでもチャレンジコンテスト”は継続される。
- ・高等教育機関はその存在価値を含め、より長期的なビジョンに基づく選択的投資と柔軟な運営の両方が求められている。やや短期的な対応に追われがちな学園・大学運営において、より高次の投資を実現すべく、より一層の研鑽と努力を行いたい。

以 上